

第十一回「いのちの授業」大賞 受賞一覧

【大賞（知事賞）】 作品名 「ぼくの妹」

筆者

安西 立希 藤沢市立六会小学校 三年

授業実践者

安西 さつき 保護者

【教育委員会賞】 作品名 「私の推し牛」

筆者

新明 滯奈 神奈川県立相原高等学校 一年

授業実践者

佐々木 真彩 神奈川県立相原高等学校 教諭

【神奈川県新聞社賞】 作品名 「母から子へ、子から僕へ、伝わる温もり」

筆者

下鳥 友佑 神奈川県立相原高等学校 三年

授業実践者

杉山 由吏 神奈川県立相原高等学校 教諭

【tvk賞】 作品名 「みんな」

筆者

稲留 千珠 厚木市立小鮎小学校 五年

授業実践者

遠藤 涼 厚木市立小鮎小学校 教諭

【神奈川県PTA協議会会長賞】 作品名 「生と死は隣り合わせ」

筆者

大村 ここの 逗子市立沼間中学校 二年

授業実践者

市原 こずえ 助産師

【ともに生きる社会かながわ憲章賞】作品名 「人それぞれ同じ人はいない」

筆者

有本 美凜愛

茅ヶ崎市立第一中学校 一年

授業実践者

原田 和子

茅ヶ崎市立第一中学校 校長

【優秀賞】作品名

「いのちのきもち」

筆者

大藤 暖也

南足柄市立岩原小学校 一年

授業実践者

大藤 友香梨

保護者

【優秀賞】作品名

「命でつながっている」

筆者

田山 光津

横須賀市立長井小学校 四年

授業実践者

石橋 直生

横須賀市立長井小学校 教諭

【優秀賞】作品名

「私の大切なたからもの」

筆者

松澤 晴乃

藤沢市立六会小学校 五年

授業実践者

松澤 美奈子

保護者

【優秀賞】作品名

「いのちの重み」

筆者

羽切 翼

清川村立宮ヶ瀬中学校 二年

授業実践者

佐古 忠

清川村立宮ヶ瀬中学校 教諭

【優秀賞】作品名

「本当の平和へ」

筆者

小山 優音

相模原市立相陽中学校 三年

授業実践者

橋本 美樹

相模原市立相陽中学校 教諭

大賞(知事賞)

「ぼくの妹」

藤沢市立六会小学校

三年 安西 立希

ぼくにはふたごの妹がいる。ぼくが二才の時に生まれた。

妹たちが生まれた日、お母さんがいつも通り保育園に送って来て、夕方お母さんのおむかえをまっていた。でもなかなか来なくて、来たのはおばあちゃんだったから心配になった。その日からしばらくお母さんに会えなくなつてさびしかったのを今でもはつきりとおぼえている。おばあちゃんに、

「お父さんおそくなるからとまっていきなよ。」

と言われても、ぼくは家に帰ればお母さんが帰っている気がして、お父さんといっしょに毎日家に帰り続けた。お母さんは一週間位でもどつてきたけどぼくにはとつても長くかんじた。お母さんの顔を見た時は、ちよつとてれくさかったけど本当はだきつきたいぐらいうれしかった。赤ちゃんといっしょに帰ってくると思つていたら、お母さんしかいなかったからふしぎだった。妹たちは二ヶ月半も早く生まれたから、しばらく入院することになった。

ぼくは去年の十一月、お母さんにつれられて、あるイベントに行つた。それはかながわりトルベビーサークルペナの「世界早ざ

んじデー写真てん」だった。

そこには妹たちと同じように、小さく生まれた赤ちゃんたちの入院中の写真や、成長して今元気にすごしているすがたの写真がいっぱいかざつてあつた。

その時、お母さんから妹たちの話を聞いた。

妹たちは早く生まれたから、体温を調せつするのが苦手で、保育きというはこの中に入つてすごしていたこと。とちゆうで息をするのをわすれてしまうので、人工こきゆうきというきかいをつけて、こきゆうをたすけてもらつていたこと。さいしよはお母さんのおっぱいをちよくせつのむことができなかったから、細いくだを口に通して、一ミリリットルのミルクを時間をかけて注入していたこと。ほかに、ちゆうしゃをしたり、点てきをしたり、いろいろなけんさをたくさんして、おうちでみんなですごすためのじゅんびをしていたことを知つた。いたいことをいっばいされて、たくさんのちりようをのりこえてきた妹たちの力強さをかんじた。

今は十人に一人が早く生まれてくることもきいた。いりようのぎじゅつが進化したからこそぼくの妹たちもたすかつたのだと思うと、本当にすごいことだと思つた。

そんな妹たちも今は小学一年生になった。二人ともわがままでぜんぜん言うことをきかなくて、ぼくやお母さんをこまらせる。二人でぼくをいじめから、きらいになつたり、むかつくこともある。でも、今こうしてけんかができるのは、妹たちが元気なし

ようこだ。家族みんなでお出かけたり、おいしいごはんを食べたりできるのは、とても幸せなことだと思う。

ぼくは、たくさんの人にささえられて生きていることを知ったので、いのちを大切にこれからも元気にみんなであらってすごしていきたいと思う。

教育委員会賞

「私の推し牛」

神奈川県立相原高等学校

一年 新明 滯奈

私が相原高校の畜産科学科に入学して早四ヶ月が経ちました。そこで私はとある一頭の牛と出会いました。

相原高校に入学して、部活の体験入部が始まったとき、私は入学前から興味のあつた畜産部牛プロジェクトの体験入部に参加しました。そこで私は、先輩方に部活のことや作業のことなど、色々なことを教えてもらいました。そこで、相原高校にいる牛の名前を覚えてくれたのですが、その時はまだ同じ種類の牛だと見分けることができず、すぐに覚えることができませんでした。しかし、先輩は、

「最初はみんなわからないけれど、誰かわかってくると一番好きな推し牛もできてくるようになるよ。」

と教えていただき、私にも推し牛ができるようになるのかと待ち遠しい気持ちになりました。その後、子牛を紹介してもらった時に、私はとある牛に目を奪われてしまいました。まだどの牛か見分けがつかないのに、何故かその子は、他の牛たちとは違う気がして自然とその子の体へ手が伸び、触っていました。他の牛も十

分可愛らしいのですが、その子からは私を虜にする魅力を持っているかのように他の子よりも、かわいいと感じました。その時に、私はその子に一目惚れをしました。そして、先輩の言葉を思い出し、この子が私にとつての推し牛なんだと気づきました。その後、畜産部牛プロジェクトに入部し、その子について詳しく先輩に聞いてみると、その子は褐毛和種と黒毛和種の交雑種で肉牛であることが判りました。肉牛ということで、いつこの子は出荷されてしまうのかを聞いたところ、私達が三年生になった頃に出荷されると知り、私はなんとも言えない感情が湧きました。

部活にも慣れてきて、肉牛の餌と乳牛の餌で使われている餌の種類の違いなどが分かるようになってきた時、私の推している牛の餌が飼育中の肉牛と同じ餌の種類になったことに気づきました。本格的に肉牛として肥育が始まることを知ったのです。肉としての現実味を帯びてきたことで、私は心が締め付けられるような感覚になりました。

夏休みに入り、その子と触れ合う機会が多くなって、私は好奇心でその子のお腹に耳を当ててみました。すると、心臓の音がしつかりと聞こえてきました。目の前で元気に動いているため、この子が生きていることは当たり前なのに、なぜだか生きていることを再確認し、

「ああ、この子にはちゃんといのちがあつて生きているんだ。」と実感しました。しかし二年後、今側にいるこの子の儂いいのちがこの世からいなくなってしまう、そしてお肉となり、人のいの

ちを繋いでいく。それは、この子だけでなく今肉牛として肥育されている牛達も、全員そうなのだと感じました。ですが、この子は人のいのちを繋げる大事な役目をしています。これは、勝手に人が決めた事だけれど、愛するこの子が少しでも人にいのちを繋げられるように、きちんと育ててあげたいと思いました。

家畜に対して情を持って育ててはいけないと聞いたことがあります。しかし、私はその子の最期を迎えるときに、どんなに悲しくなるとしても情を持って育てたいと思いました。なぜなら、誰しも絶対に動物に対して情を持たずに育てることはできないと思うからです。情を少しでも持つてしまうのなら、たくさん情を持つて育てる方が、自分にとっても家畜にとつてもいいと思うからです。私は、牛のいのちが大切な存在であると理解しながら、これからも育てていきたいと思えます。

「母から子へ、子から僕へ、伝わる温もり」

神奈川県立相原高等学校

三年 下鳥 友佑

僕は二年前、神奈川県立相原高等学校の畜産科学科に入学しました。入学早々、畜産部牛プロジェクトに入部しました。入部のきっかけは、体験入学の時に牛にふれあい、その温もりから、

「今この牛は生きているんだ。」

と感じ、この大きな動物についてもっと知りたいと思ったことがきっかけでした。

入学してから二年間、僕は畜産や農業に関して多くのことを学び、部活でも貴重な体験を幾つもすることができました。二年間で十数頭の子牛が生まれ、日々成長する牛たちを見て喜びを感じていました。

今年の六月四日、学校で飼育するエアシャー種の母牛の分娩が行われました。この時点で分娩予定日から約一週間遅れ、更その間、母牛は一度牛舎から脱走し、本来食べてはいけない餌を大量に食べてしまいました。ハブニングが多かった中での分娩、僕は他の部員や先生と共に唾を飲みながらその時を待ちました。

見守り始めてから一時間以上が経過し、ついに破水が起こりま

した。母牛の陣痛は激しくなり、何度も立っては座りを繰り返していました。幾度となく見た光景ですが、それでも心が痛みます。破水が起こってから数十分経ち、母牛の体力を考えて先生が分娩を手助けすることを決め、母牛に近づきます。その時、先生が僕の名を呼び、手伝うようにと指示を出しました。母牛の手助けをすることができると同時に、僕は大きな不安を抱きました。

なぜなら僕は分娩介助をした事がなかったのです。緊張し、強ばる体を動かし、母牛に近づきます。母牛の膣から少しだけ出ている子牛の前足を先生と一緒に掴み、母牛が力むのと同時に一気に腕に力を入れます。子牛が膣内に引き戻されようとするのを抑え徐々に子牛は外へと動きます。僕はこの時、自分の握っている子牛の前足から小さな震えを感じました。

「この子牛は確かに生きています。」

体験入学の時に感じた温もりと同じものをその時、生まれようとしている子牛にも感じ、そう思いました。目の前の母牛は必死に痛みを耐えながら我が子を産もうとしています。母と子に合わせ、精一杯の力を込めて、とうとう子牛は生まれてきます。母牛が子牛を舐めるのを見ながら、僕はホッと胸をなでおろし、

「よく頑張ったね、お疲れ様。」

と声をかけました。胸の奥底からじわじわとあたたかく、重いものが込み上げる感覚があり、息を大きく吐いてそれを外へと出すと、一気に緊張が解けました。気づくと時刻は十九時三十分を超

えており、辺りは真つ暗で他の生徒は殆どが帰宅していました。

生まれてすぐの柔らかい蹄、長く垂れるさい帯、真つ暗な胎便。入学してから二年間、多くのことを学び、何度も分娩を見ましたが、この日の分娩は僕に、「知識としての理解」と「実際に経験すること」では異なる学びを与えてくれることを教えてくれました。日々の授業と牛の管理、知識と経験を合わせることで新たな発見や学びを得ることができたのだと思いました。ハプニングがあり、通常より大きく成長した子を、長時間かけて産んだ母牛と必死に生きようとして生まれてきた子牛からは、確かな生命を感じる事ができました。この時の経験を活かし、今を生きる動物や人々は母や子が大変な思いをして生まれてきたということを心に留めて、この先出会う動物達の命に真摯に向き合い、将来自分の家族を守っていききたいと思えます。

「みんな」

厚木市立小鮎小学校

五年 稲留 千珠

「みんな、放送をよく聞いて。」

学校の予告なしの避難訓練をした時に、私は、声をあげました。私は、学校の予告なしの避難訓練をして思ったことが二つあります。一つ目は、本当に「こわい」と思ったことです。私は、訓練の時、廊下にいました。休み時間の事です。突然、地震発生の放送が流れました。廊下には一年生から三年生までの低学年がいます。その場には、六年生が一人もいなく、五年生の私は、一人で声をはって、

「みんな、放送よく聞いて、静かに。」

と呼びかけました。低学年は私をじっと見て静かにしていました。でも、私の心の中は大パニックです。訓練だとわかっていても、とても怖かったです。

二つ目は、今まで経験した避難訓練で、自分がどれだけ成長しているのが分かったことです。なぜなら、怖くて、パニックを起こしていた時でも、

「みんな、放送をよく聞いて、静かに。」

と注意をすることができたからです。訓練の時に思ったことは、何か災害などが起きた時にきちんと動くことができるのは、家族や先生、地域の方たちのおかげだと思います。そして、これからも根気強く真剣に訓練をすることが大切であると思いました。

避難訓練後、担任の先生が

「静かにして、放送だよ。」

と言いました。するとクラスみんなは静かになって、避難訓練の担当の先生の大切な話を聞くことができました。担当の先生の話を聞きながら、私も訓練の放送が突然なつたとき、一年生に、

「みんな、放送をよく聞いて、静かに。」

ということができてよかったですと思いました。

また、学校だけではなく、家族でも話し合っていることがあります。それは、「みんなですっかり行動すること」です。私の家族は五人家族で、犬が二匹います。

「もし地震があつたら、犬はどうするの。持ち物は。」

と家族に聞くと、母は、

「犬は連れていく。リードをしつかりつけて、みんなで逃げる。」

と答えました。また、

「持ち物は、災害バックがあるから、子どもたちは、命でいいよ。」

と言いました。災害時に私たちが絶対忘れてはいけない持ち物は、

「命」です。私は、こんなにたくさん考えてくれている両親に感謝しなければいけないと思いました。私にできることはなにかと、災害バックの中を確認しました。入っていたものとしては、一つ目のバックには、二リットルの水が、六本近く入っていました。二つ目のバックには、充電器、食糧など必要なものがたくさん入っていました。

「みんな、放送をよく聞いて、静かに。」

突然大きな声で注意をして、周りのみんなにいやな目で見られるかもしれない、悪口を言われるかもしれないなど、不安でたまりませんでした。

でも、訓練の後の放送を聞いて、なんだかほっとしました。自分とは間違ったことをしていなかったとわかったからです。この気持ちには、言葉では言い表せません。

学校で学んでいることは

- 一 人の話をきちんと聞く
- 二 「お・か・し・も・ち」を守る
- 三 協力をする

です。これからも協力し、自分の命は自分で守っていききたいです。

神奈川県PTA協議会会長賞

「生と死は隣り合わせ」

逗子市立沼間中学校

二年 大村 ことの

私にはとても大切な愛猫がいた。その子がいれば、どんなことも頑張れると思えるほど大好きだった。

その子の名前は「三号」といい、みんなからは「サン」と呼ばれていた。名前の由来は、大村家の一員になった順番で、父と母、三号、その後に見、私が生まれたので、三番目にきたから「三号」と命名されたそう。

性別は女の子で、種類はロシアンブルー、人見知りな性格だったので、私達家族以外にはあまり懐かなかった。

サンは表情が豊かで、思っていることや感じていることなど全て顔に出してしまうので、その百面相を見るのはとても可愛らしく、とても愛おしかった。これから先も、ずっとこの子を見ていたいと、見続けていたいと、心から強く、強く願った。

しかし、サンの人生に幕が降りようと、命が尽きようとした日が突如やってきた。昨日までは元気だったはずのサンが、全身の力が一気に抜けたかのように倒れこみ、苦しそうにし始めた。

その時サンは十八歳で、人間の年齢に例えると八十八歳という

おばあちゃん猫だった。動物病院から長寿猫という表彰状をもらっており、私は嬉しくもあつたが、寿命が迫ってきている気がして、複雑な気持ちでもあつた。

目の前の命がいつなくなってしまうか分からない、そんな状況で夜を迎え、不安と悲しみに押し潰されそうになりながら眠りに落ちた。

目を覚まして、その日、私はサンの元から離れなかった。母は仕事でいなかったため、父と兄とサンの頭を優しく撫で続けた。みんなその手は震えていた。私は耐え切れず、今にも涙が零れ落ちそうになったので、一階の自分の部屋に駆け込んだ。

やつのことで落ち着き、上へ戻ると、サンを囲んで二人が泣いていた。目の前が真っ暗になった。サンの元へ行くと、さつきまで微かに動いていたはずの左胸辺りが動いていなかったのだ。私は自分を責めた。なんで最後までサンの傍にいなかったのか。兄から、冷たくなる少し前、誰かを呼ぶように鳴っていた。必死に鳴っていた、と聞き、涙が止まらなかった。もしその呼んでいた相手が私だっただらと思うと、。。。

私はサンの命が尽き、もう二度と会えなくなってしまうことに対して、悲しいだけではなく、学んだこともいくつもある。

一つ目は、当たり前のようにいた存在が日常からいなくなってしまう時、その存在の大切さを強く実感するということ。命は永遠ではないので、後悔をしないよう、身近にいる大切な人に感謝を伝えていくこと。これは簡単そうに見えて難しい。私はみんな

にこのことを知ってほしいと思う。

二つ目は、大切な人がいなくなってしまうことは、決して悲しいことだけではないということ。悲しみを自分で乗り越える力があると人は強くなる。また、悲しみや辛さを知っているからこそ、人に優しくできる。私はそんな強くて、優しい人になりたい。

命とは尊いもの、儂いもの、これはこの世に存在している人全てに言えること。私はもう二度と後悔をしないよう、日々生きていきたい。

ともに生きる社会かながわ憲章賞

「人それぞれ同じ人はいない」

茅ヶ崎市立第一中学校

一年 有本 美凜愛

私は校長先生の「いのちの授業」を受けて、普段あまり考えないお母さんの事について考えてみました。

私のお母さんは、私が小さい頃病気で車イスになりました。私のお母さんは普段とても笑顔で、元気な人でした。ですが、病気になった時お母さんから笑顔が消えてしまい、部屋に引きこもるようになってしまいました。その後も、お母さんは私と口を聞いてくれず自分の気持ちをコントロールできず、うつ病になってしまいました。

その後しばらく時が経ちお母さんの気持ちが落ち着いてきた頃、車イスののって初めて家族で買い物に行きました。私の中では、お母さんはもう元気になったのかと思ひ込んでいました。ですが家に帰って来た後のお母さんは、また元気のない姿にもどっていました。私はお母さんに、

「どうしたの？」

としつこく聞いてしまいました。するとお母さんは、

「こんな車イスのお母さん嫌なんですよ。」

と強く大きな声で言われました。どうして、あんなことを言ったのか、あの時の事を私は、お母さんに聞きました。お母さんは、「初めて車イスののって買い物に行って、周りから得体の知れない物を見るように見られていた。」

と言っていました。これを聞いて私は、そんなに辛い思いをしていたんだと涙が出ました。小さい頃の私はお母さんに強く思いを言われた時、

「だって車イスでもお母さんはお母さんでしょ。」

と言いました。私はまだ小さかったので正直に自分の気持ちを伝えただけだったけれど、お母さんはその言葉で立ち直れました。

今では昔とは逆に、周りから注目されるような蛍光ピンクでキラキラなラメのはいった派手な車イスののっています。元の笑顔で元気なお母さんにもどっていましたし、車イスだからといって色々な事を諦めてしまうのではなく、常に前を向いて頑張っている姿に私は本当にうれしかったです。

私は障がい者といって、別々にされるのは違うと思います。だって障がいがあってもなくても、みんなこの地球上にいる人間だからです。人それぞれの人生の生き方、人それぞれの個性、障がいがあるかないか、同じ人なんて決していません。だからこそ差別をせずみんながみんなのことを理解してこれから先、生活していくことが大切だと思います。

優秀賞

「いのちのきもち」

南足柄市立岩原小学校

一年 おおとう はるや

ぼくはときどきさびしいきもちになります。それはぼくが四さいのときにしんでしまったじいじをおもうとさびしくなります。おかあさんに

「じいじのことおぼえているの？」ときかれるけど、おぼえています。

こうえんであそんだこと、いっしょにおすしをたべたこと、おまつりにいったこと、たのしいおもいでがたくさんあります。

でも、おもいだすとなみだがでます。あいたいとおもうのにもうあえないからです。

きよねん、ぼくにはじめてのいとこがうまれました。かわいいおんなのこです。ぼくがうたうとわらってくれます。かわいすぎて、ずっといっしょにいたいです。はじめておすわりができたときは、みんなでパチパチしてよろこびました。ぼくがあかちゃんるとき、じいじもおなじきもちだったとおもうとうれしくなりました。

もうあえないのはさびしいけど、じいじにもぼくのたのしいこ

と、しあわせをはんぶんこしたいです。ぜったいにわすれないよ、だいすきなじいじ。

ぼくはうまれることができて、みんなにあえてうれしいきもちです。

優秀賞

「命でつながっている」

横須賀市立長井小学校

四年 田山 光津

「命ってだれかにあげたり、もらったりすることができますか。」
道徳のじゅ業で、先生が私たちにしつ問しました。私をふくめてクラス全員が、

「できないでしょ、できたらこわいじゃん。」
と、言いました。私もその時は、命は一つしかなく分けることができないと考えていました。

しかし、じゅ業の終わりがわ、考えが少し変わりました。

道徳の時間、「五百人からもらった命」を読みました。読んだ直後は、自分の思いは変わらなかったけれども、最後のふり返りを書きながら、文を思い起こした時にふと思ったことがあります。もし、「けん血」という活動がなかったら、道徳で読んだ話のかん者は、命が助かっていなかったかもしれないですね。でも「けん血」という活動があったおかげで命が救われたと思いました。だから、けん血に協力した人は、命を分けたことになるのではと考えました。

私のお父さんもその一人です。私のお父さんは、よくけん血を

しています。その理由はわかりません。そこで、お父さんにインタビューしてみました。

「どうしてよくけん血をしているの。」
と、聞いてみると

「パパは、A Bがたでしょ。A Bがたの人は少なくて血がたりてないんだよ。それにパパが手術するってなったら血を最後に足すでしょ。だからおたがいさまなんだよ。」

「たしかにそうかもしれない。」
と思いました。

けん血は、命があぶないかん者、血を全て入れかえなくてはならない人のためにあります。けん血した人の血が他の人の体内に入ると、けん血した人は、だれかの命を救ったことになります。けん血する人の中には、

「前に子供がけん血で命を救ってもらったから。」
などと、おんがえしとして来る人もいるそうです。一つの命のためにもみんながつながっています。だから、

「私、前に子供がけん血してもらったから、けん血に協力しよう。」

とおかえしの気持ちが生まれると考えました。

大人になったら、お父さんのようにけん血をしようと考えました。まず、自分の命を一番に大切にし、そのうえで、人の命をできるかぎりで救ってあげたいです。けん血以外でも、たとえば、町でたおれている人がいたら、一一九番をかけて、救急車をよん

だりするなど役に立ちたいです。こんな小さなお手伝いが本当
は、大きなお手伝いだと思います。

優秀賞

「私の大切なたからもの」

藤沢市立六会小学校

五年 松澤 晴乃

十歳になった私に弟ができました。お母さんのおなかの中に新しい命があると知った時、とてもうれしかったです。神様におねがいしていたので、

「叶った。」

と思いました。

大きくなっていくお母さんのおなかを見て赤ちゃんが成長しているのだな、と安心しました。

出産の時、お父さんと二人の生活は大変でした。特にごはんの時、手作りではないのでお母さんの温かいごはんが食べたくなりました。

「やっぱりお母さんがいないとな。」

と早く帰ってきてほしくなりました。

弟が生まれてビデオ通話で見た時は、

「しわしわで、ふにゃふにゃで、すごく小っちゃくてなんてかわいいのだろう。」

と感げきしました。

とうとうお母さんと弟が元気に退院する日、私はワクワクしながら学校から家に帰りました。初めて弟をだっこして、かるくてフワフワでおどろきました。

五ヶ月たった今、弟はかみの毛がふえ、笑顔がふえ、体重もふえて、毎日毎日成長を感じます。ねがえりをしてどこまでも行つてしまい、もうすぐハイハイをしそうです。そんな弟の姿を見て、「一年前は、となりにいかなかったのに。」

となんだか不思議な気持ちになります。

私は、弟が生まれたことで命について考えたことが三つあります。

一つ目は、お母さんから、

「生まれるか分からないから友達に言わないで。」

という言葉を何度も聞いて、

「無事に生まれることは、きせきに近くて、一日一日を大事に過ごしていけないといけない。」

ということです。

二つ目は、私も弟もお母さんのおなかの中で育ててくれる時に、食べ物のうちがまんしなくてはいけないものがあつたり、動くのが大変だったりしたのを知っています。命は簡単に出来るわけではないので間違つたことをして赤ちゃんに悪えいきょうを与えたら命がなくなってしまう可能性があるから、

「命はとても繊細なものだ。」

ということですよ。

三つ目は、今までお父さんとお母さんが楽しいことをさせてくれたけど、家族みんながいなければ出来ないから、

「みんなみんな生まれてきたことは、とてもとても幸せなことだ。」

ということですよ。

これからも家族四人で笑いあって楽しい日々をすごしていきたいです。家族みんなの命が、私のたからものです。

優秀賞

「いのちの重み」

清川村立宮ヶ瀬中学校

二年 羽切 翼

『かわいそうなぞう』私は、国語の授業の本紹介時にこの本に出会いました。

私は、普段本を読みません。小説など文字の多い本は苦手な本というものから離れて過ごしていました。そのような私にとってこの本はとても読みやすく衝撃的で考えさせられる一冊でした。昔、日本はアメリカと戦争をしていました。その頃は毎日毎晩、爆弾が雨の様に振り落とされてきました。もしもその爆弾が動物園に落ちてしまったらどうなるのでしょうか。きっとライオンも虎もクマも象も暴れて町はもつと騒ぎになってしまうでしょう。そこで上野の動物園では、動物を殺さなくてはいけなくなりました。動物達は、何も悪い事はしていません。動物達を食べる為でもありません。ただ騒ぎにならない様に殺すのです。暴れてしまうかもしれないから殺すのです。動物園の人達は考えました。動物達を殺さないで済む方法はないかと。ダメでした。そんな方法はありませんでした。結局動物達は、全員殺されてしまいました。

私が特に印象に残っている場面は人間の都合で動物達の命を絶たなければならぬということでした。そこで私は現在の動物の殺処分について調べることができました。

調べていると二つの事がわかりました。

一つ目は、全国の殺処分数についてです。

二〇二〇年四月一日から二〇二一年三月三十一日までの調査によると、犬の殺処分数全国で一番多いのは、香川県で五四一匹でした。一番少ないのは石川県と福井県で殺処分数ゼロでした。私が住む神奈川県は、三十一位で二五匹でした。猫の殺処分数が全国一番多いのは、福島県で千七百六十七匹でした。一番少ないのは、熊本県で十一匹でした。神奈川県では二百七十六匹でした。神奈川県では、合計二百九十八匹ととても多いということがわかりました。

二つ目は、世界の中で日本は動物達への愛護精神が足りないということでした。例えばドイツには「犬命令」というものがあります。「動物保護―犬に関する命令」です。屋外での十分な運動、飼育者との十分な接触〔第二条〕生後八週間以下の子犬を母犬から引き離すことを禁止〔第二条〕と他にもあります。

そこで私には何ができるかと考えました。日本の法律を変えるなど大きな事は私一人の力ではできません。そこで調べたのが、ペットショップではなく保護センターで引き取るという方法と、募金するという方法があることがわかりました。そこで私は、母に捨て猫や捨て犬の助けになりたいと話をしたらうちでは、捨

て犬と捨て猫を保護をしていたという事を教えてもらえました。今飼っている猫ももともと捨て猫だったそうです。私は、とても嬉しくなりました。けれどそれだけだと殺処分される数は、少ししか減らないと気づきました。そこでどうしたら減るのかと考えたところ、動物を飼う時すっかり最後まで責任を持って飼うという事を考えてから飼うという一人一人の努力が大切だと思います。

私は今努力という言い方をしましたが、本当にそれは努力なのでしょいか。一つ一つの命を重んじる事、そんな事は当たり前ではありません。私はまだそれ程長い生を受けた訳ではありませんが、命の重さに関しては何度か考えさせられました。道徳の授業の時間には、いただきますの意味について考えました。ペットの猫が死んでしまった時にも、ペットの犬が轢かれて死んでしまった時にも考えました。まだ中学生の私でさえ何度か考えた事があるのです。学校で教わる程度の事なのです。つまり普通の事なのです。できて当然の事なのです。何故犬や猫は捨てられてしまうのでしょうか。何故自分のペットを捨てる人間がいるのでしょうか。

主に飼い主が犬を捨てる理由としては、「引越先がペット禁止の場所である」「動物が想定以上に大きくなった」「繁殖してしまって飼えなくなった」「経済的に余裕が無くなった」などの理由がとて多いのだそうです。その様な思考に陥いる人が大勢いるのだそうです。その様な理由でたく

さんの動物達が捨てられ、時に野良になり、時に殺処分されてしまふのだそうです。

以上の事から、繰り返しになりますが、私はこれからの人生、状況や事情を理解し、自らの判断、行動に責任を持たなければならぬと考えました。なので私はこれまで通り、ペットを大切にしていきたいと思いました。

優秀賞

「本当の平和へ」

相模原市立相陽中学校

三年 小山 優音

「戦争」この言葉からどのようなことを思い浮かべるだろうか。おそらくほとんどの人が「絶対にやってはいけないこと」だと考えるだろう。それは当たり前だ。私もそう思う。しかし今、世界中で戦争が起きているということも事実だ。きっと戦争をしている人たちもいけないことだというのは分かっているはずである。そもそも、何故戦争をしてはいけないのだろうか。たくさん犠牲が出るからなのか。勿論、それも大きな理由の一つだ。明日があるはずだった人々の命を無差別に奪うようなことは何があってもしてはいけない。でも、本当に理由はそれぞれだけなのだろうか。根本にはもっと大きな問題があるのではないか。考えていうと思う。

私は毎年、広島県にある母の実家へ行っている。戦争について「広島」というとほとんどの人が「原爆」を連想するだろう。一九四五年、広島県と長崎県に原子爆弾が落とされた。原子爆弾とは原子力を利用した爆弾で、その破壊力は普通の爆弾の数百万

倍というとても強力なものだ。私の曾祖母はその戦争、原爆が落とされた当時を経験している。昭和二十年、曾祖母が三十二歳のときだ。八月六日午前八時十五分、広島県広島市に原子爆弾が投下された。市外にあった曾祖母の家からとても強く光ったのが見えたという。その後、二ヶ月前に生まれたばかりの私の祖母をおぶって救護活動へ向かったそうだ。曾祖母は私が一歳の頃に亡くなってしまったため、直接話を聞くことはできなかったが、私の母は子供の頃に何度もこの話を聞かされたそうだ。私は原爆ドームを見に行ったときに母からこの話を聞かされた。そのときとても怖い気持ちになったのを覚えている。きっと目の前の建物にもたくさんの方がいたのだろう。明日があるはずだった大勢の人々の命が一瞬にして跡形もなく消されてしまう。戦争とはそういうものなのだ。

とはいっても、その当時についてのことはどれだけ頑張っても到底理解しきることはできないだろう。時代が進むにつれ感覚が薄れていってしまうのも仕方ないことだ。では、今の私たちにできることは何だろう。それは過去をふり返ることだけではない。根本にある原因を考えることだ。

戦争は対立によって起こる。そして、その「対立」が発生する大きな原因となるものは「違い」だ。宗教の違い、文化の違い、人種の違い、言語の違い、考え方の違い。今までの戦争はこれらのことをきっかけとして起きている。人間は自分と違うもの、「自分達」と違うものを嫌う習慣がある。例えば、全員が白い服

を着ている中、一人だけ黒い服を着ていたとしたらその人はきつと集団の中で浮いた存在になってしまいうだろう。そしてしだいに白い服の人々は黒い服の人を嫌がるようになる。他の人々は同じように嫌われる立場になることを恐れ、多数派に荷担する。これは、いじめや差別が起る原理である。戦争も同じだ。自分達と違う考えを持った集団を嫌い、「対立」する。そして互いに相手は間違っていると自分の考えのみを主張し、戦争としてぶつかり合ってしまうのだ。でも考えてみてほしい。すべての人が同じ考えを持ち同じ行動をしていたらどうだろうか。確かに対立するとは無くなるだろう。しかしきつと、人と関わるものがつまらなくなってしまう。考え方の違う様々な人と関わっていくことで、私達は新しい発見をすることができるのだ。「違い」を楽しむことができるのは、本来人間が持つべき素晴らしい特徴の一つであるはずなのだ。

何故戦争をしてはいけないのか。それは様々な人がいることを受け入れられず、対立することで起きてしまうものだからだ。つまり、戦争が起こってしまう状況、相手との違いを認められない、受け入れられていないというそもそもの状況が間違っているということだ。

しかし、今もなお戦争は起こり続けている。ロシア、ウクライナだけではない。世界各地で紛争が絶えないことも、ずっと前からある問題だ。性別や人種、国籍など多様性で溢れている現代社会において必要になってくるものは、「違い」を受け入れていく

ことだと思ふ。戦争がなくなっただけで平和になったと言うことはできない。様々な人が幸せに過ごせる世の中になることでやっと、「本当の平和」だと言うことができるのだ。

そのために、私達にできることは何だろう。まずは身近なことから考えてみてほしい。自分の意見を押しつけてはいないだろうか。誰かの事を否定してしまっていないだろうか。今からでもまだ間に合う。ほんの小さなことでも良い。少しずつ、身近なことから自分の意識を変えていくのだ。「本当の平和」を創ることができるのは私達だ。